

発行/平成元年10月15日 No.13
えひめ地域づくり研究会議
(財)愛媛県まちづくり総合センター

まちづくりネットワークえひめ

舞 とうん

VOL 13

特 地域の暮らし “生産と流通” 集

生産と流通・観光拠点での実践
/瀬戸町
くらしと生産を結ぶ一地域加工場の
チェーン化をめざして /肱川町
機能分担と連帯感によって築きあげ
た特産品づくり /小田町
「産直と地域のくらし」
/えひめ生活協同組合
生産と流通・暮らしの中から
/編集事務局

研修レポ

地域づくり文化フォーラム'89 飯田
「あすの自治体を語る…」
第六回全国自治体政策交流会議
第三回自治体学会からの報告
'89まちづくり人のつどい

元気印REPORT

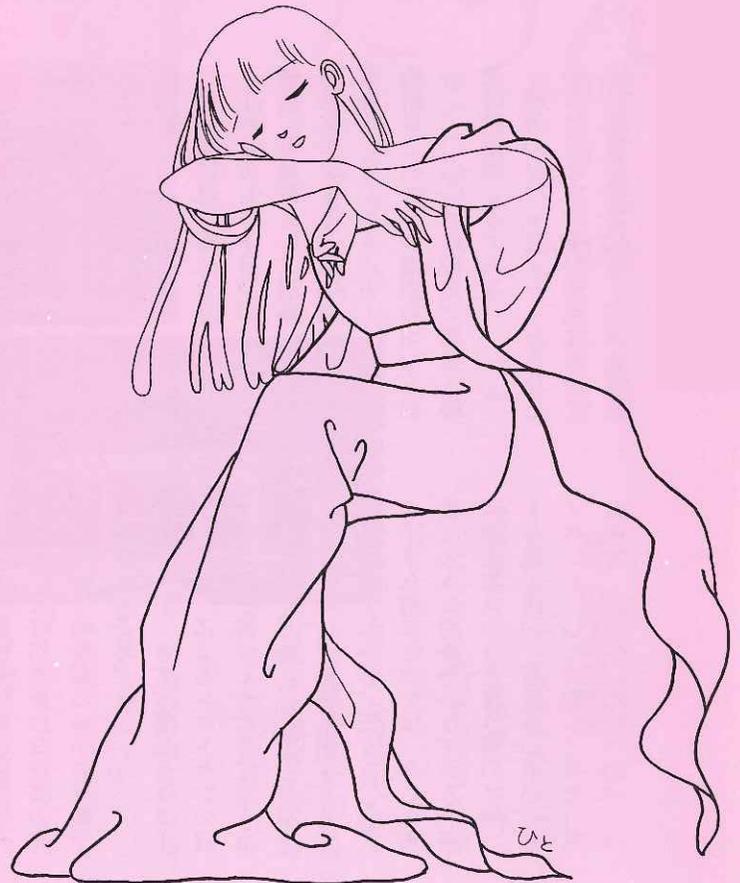
三瓶町「十人會」
生名村「ろうそく塾」

研究会議 News Letter

紙上フォーラム
「市町村の基本計画を考える…」から

MESSAGE

あなたのコーナー
TOWNタウン パソコン通信





農業と観光の

かかわり

農業と観光の連携、古くて新しいテーマである。

古来、農村地域の生産活動やその活動が作りだす風景そのものが観光という要素をもって来た。今更何故農業と観光なのかと言われるかも知れない。「地域の暮らし、生産と流通」という今回の特集企画からすると、ポイントがずれているかも知れないが御了承願いたい。

しかし、農村地域の伝統的慣習や生活の営みそのものが、その地域の歴史であり、文化でありこれからの観光・リゾートを個性ある地域振興・活性化の視点で位置づけて行く上で重要なポイントである

と思われる。

農村地域の生産景観、例えば田植風景や収穫作業あるいは牛や馬の放牧風景などは、何の手も加えずそのまま観光となり得る生産活動である。

一方、農村の生産にまつわる伝統行事、例えば収穫祭や豊年祭など生活の中で脈々と生き続けて来たお祭りや郷土芸能なども農村文化の大きな財産である。

いま農村、とりわけ僻地農山村では全国至る所でリゾート・ラッシュである。そして、どこか計画もゴルフ場・マリナー・スキー場・ホテルなどの何点セットが主流で、どこを切っても金太郎飴とよく批判されている。という瀬戸町でも同様のリゾート構想を持っており、今後どれだけ佐田岬半島、瀬戸町らしさを創り出して、差別化・個性化を図れるかが大きな課題である。

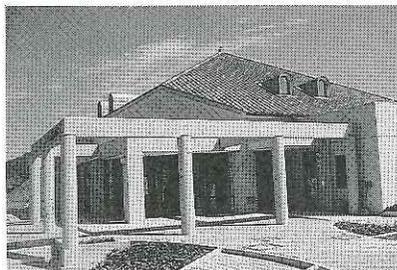
地域内での異業種提携

メロディーライン（佐田岬半島観光推進協議会が国道一九七号の

全線開通を機に全国から愛称募集した名称）開通後の観光受入れ体制整備の一環として、瀬戸町では「農業公園」づくりに着手して、地域内に新たな経済の流れをつくり出そうとしている。



▲レストラン
“風車”



◀農業活性化
センター

域の中で持てる経済力にどれだけ付加価値をつけて、地域内経済の効率化、活性化を図るかである。地域の生産と流通を考える場合、今までの大きい一本のパイプなのか、あるいは、小さくてもパイプの数を増やすのかのいづれかである。

需要が生産供給を生み出し、又供給が新たな需要を創り出す。瀬戸町では、メロディーラインと言う道路開通の条件整備、即ち外的要因をいかに活用して、町内に新たな経済の流れを創るかへの挑戦である。

具体的には、第三セクターによるレストランの経営、町事業として農業活性化センター・風力発電施設とそのエネルギー利用によるモデル温室栽培など約一〇、〇〇〇㎡の敷地で農業と観光の拠点づくりである。

経済のソフト化・サービス化と言われる今日、農村地域にあっては、農業の商業化サービス化等

の小さな町にとっては、今この事業に大きな期待をかけている。瀬戸の花嫁まつりと言う夏のイベントを過去四回、若者達の手づくりの中で、高茂牛（和牛）のバーベ

キユーを一つのセールスポイントとして位置づけている。町内の高茂牧場に和牛が飼育されて、主として阪神方面へ市場出荷されており、結構評判の肉牛である。せめて年に一回位は、自分達で味わい、その良さをPRしようという試みである。そして、レストランは、イベントから発展した常設店舗である。

魚貝類にしても、当佐田岬地域は宇和海、伊予灘と恵まれた漁場を抱え豊富な海の幸がある。生産現場では安く、市場では高くなりおいしい所は全て町外に持つていかれる日本の特殊な流通のしくみがある。このような仕組みから脱皮し、地域内で付加価値をつけて経済の力を生み出さなければ、いつまでも、搾取の対象としての農村経済から抜け出すことはできない。



ゴミ公害型から 産業としての観光

メロディーライン開通後の当佐田岬地域への観光客は急増し、昭和六十三年の入込客は、約五十万人である。観光地としてその受入れ体制が不十分で、観光客が来ても、ゴミは捨てても、金を捨てんとよく批判される。

今、地域づくりの中で経済学が必要と言われる。農産物の販売額七億、水産物のそれが四億程度の瀬戸町の経済規模の中にあつて、年商一億の新しい職場（レストラン）は小さくはない。それもその大半が町外からの流入である。一億分だけパイが大きくなる訳である。今の所、食材のすべてを町内で供給する体制はできていないがこのレストランを始め、今後各種の宿泊施設やリゾート施設が完成すると、町内でどれだけ安定的に必需品を供給できる生産体制を確立することができるかにかかると。

一方、瀬戸町における雇用効果についてはどうか。現在十一名の

社員と十数名の臨時・パート従業員の職場となっている。特に社員については、その殆んどが二十才代の若者である。中には、家族を伴って、都会からUターンし定住促進に一役買っている。

「雇用の創出」古くて新しい過疎対策の最重要課題である。企業誘致を呼んでそれなりの雇用効果を創り出している町もある。しかし、土地がない。水がない。市場から遠い……と無い無いづくめの悪条件では誘致は難しい。例えば小さくても、自分達の方で町の身の丈に合った職場づくり、それが地域活性化の原点であろう。過去何十年と農村地域から高い教育投資をし、都会へと流出して行った人材を今こそ地方へ、農村へ還元させなければならぬその第一歩である。

地域経済のサービス化、今後どういう人材を、どれだけ町の中に定住させることができるかである。

瀬戸の花嫁便事業

昭和六十一年からふるさと宅配便事業を「瀬戸の花嫁便」と銘打って、ふるさと産品を年四回会員に発送している。

本事業を運営する過程で、婦人有志による「特産加工組合」が設立され、独自の産品開発に取り組んでいるが、仲々前途は厳しいようである。

県下でも、相当数の市町村が現在宅配事業と取り組んでいるが、その効果と評価は、何を目的として事業展開するかによって異なる。瀬戸町では、瀬戸町出身者とのふるさとネット・ワーク事業として位置づけている。産品の発送を通じて、町からの情報発信であり、いろいろな地域で、様々な職業・年齢の方々と情報の交流ができる。必ずしも、経済的側面からのみ評価すべきではない事業性格を持っている。

本籍人口二万五千人に対し、町からどれだけ、生き活きた情報を発信するかである。



くらしと生産を結ぶ

—地域加工場の

チェーン化をめざして—

ひじかわ特産品開発センター

藤高茂治

● 肱川町の現状

肱川町は四国山地の支脈に囲まれ平地の少ない峡谷型山村です。現在の人口は三、六〇〇人です。実際に地域で働こうと思っても、建設労務に行ったりするくらいであり、産業といえるものはありません。

こういう状況の中で、産業といえる農業はほんの一握りの方が専業で行っています。大半の農家は何らかのほかの仕事がないと生きて行けません。このため、働ける人達を当町で吸収できないものかと考え、昭和五十九年度より肱川町特産開発事業を行っています。

● 肱川町特産推進 開発事業

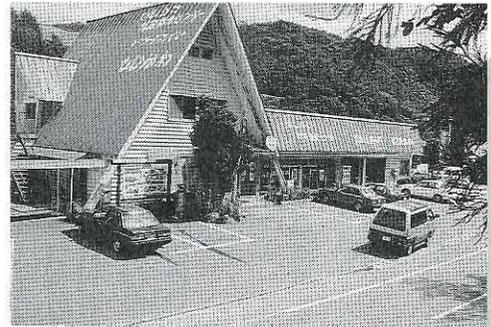
この事業は肱川町で現在生産されている農林産物や加工品などを見直しを行います。また、新しい視点から創意をこらした商品開発を行います。そして町を代表する特産品として育成定着させ、地場産業を振興し就業の場の確保と所得の向上を図ることを目的としています。



● ひじかわ特産開発

センター

ひじかわ特産開発センターは、この事業の拠点として昭和五十九年七月オープンしました。当セン



ひじかわ特産開発センター

ターの主な業務は、特産品の研究開発・農林産物の加工販売・食堂の経営・観光事業などがあります。その中で、特産品の研究開発と農林産物の加工販売を重要視しています。

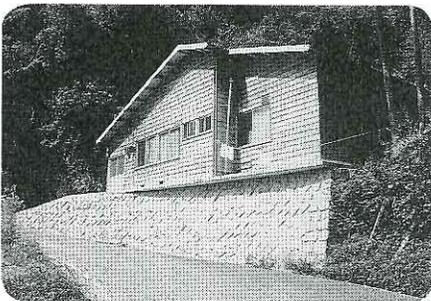
加工の原料は、肱川町で取れる農林産物を主にしています。このことは、肱川町民がつくったものを肱川町民が加工して販売することです。そのため非常によいことづくめです。しかし、実際には当センターで加工していますと、農林産物を作る人は作るだけ、加工する人は加工するだけとなり

ます。生産者の言い分と加工者の言い分とが対立し、スムーズにこゝとが運ばないことが起こってききました。さらに、生産量が増大してきますと、当センターの加工場では対応し切れなくなってきました。そのため、センターでは商品の開発と販売の拠点としての位置付けをしています。加工は生産者の方ができるかぎり行って頂けるようチェーン工場へ移行したいと考えております。

● チェーン工場

—中居谷加工場—

このチェーン工場の移行として

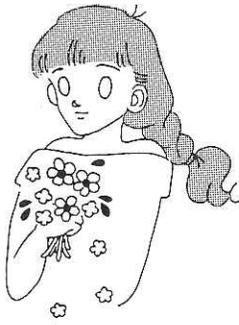


中居谷加工場があります。

この中居谷加工場の前身の中居谷生活改善グループ生産部のみなさんは昭和五十九年より特産開発センターの注文を受け「かきもち」を作っていました。この製品は、着色料を使わない自然食品として好調に売れ、生産量は年々倍増しました。とうとう当センターの加工施設および個人の家屋では、応じ切れなくなり、昭和六十二年加工場建設の運びとなりました。

この加工場（代表者・永田幸子）は、当初「かきもち」を中心にスタートしました。当然加工の原料は出来る限り自分たちで作っていました。

「かきもち」は、寒の時期（一〜二月）にしか生産ができません。



そのため、寒の時期忙しくその他の時期は暇となります。このため、販売も当センターに任ずばかりでなく、自分たち独自でも行いました。月一回の町内の小藪大師様行事やその他の行事のとき「かきもち」ばかりでなくその場ですぐに食べることで「よもぎもち」の販売をしました。すると、「よもぎもち」の評判がよく季節に関係なくよく売れました。このように販売していますと、大洲喜多郡のスーパーとの取引ができるようになりしました。そして、毎日「よもぎもち」を作りスーパーに卸しにいらっています。

さて、「かきもち」は買って帰り、焼くなりしないと食べられません。そのため、すぐに食べられるよう焼いたものの販売が考えられました。この「やきかきもち」は、スーパーでの朝市で、特に引っぱりだことなっています。

このようにして、今は午前中よもぎもち作り・配達、午後かきもち焼きをしています。



スーパーでの朝市
評判いいよ!!

そして、月一回の小藪大師様の行事には、当センターの商品も販売して頂いております。

また、加工のほうも「梅干」、
「きりぼし大根」も作るようになりました。

このように自分の手で生産・加工・販売まで手掛けると良い意味での責任感ができ、消費者との対話も多くなりました。

● 今後の方針

今後の当センターの方針として、商品開発と販売により一層力を入れ、より多くのチェーン工場を造りたいと考えています。

このチェーン工場を造ることにより、当センターと農家とのつながりを深くでき、かつ農家の所得の向上につながると考えています。





機能分担と連帯感によって 築きあげた特産品づくり

久万農業改良普及所
重藤 愛子

●小田特産品

じゅりの はじまり

「小田の味・ふるさとの味を探索しましょ」と呼びかけて始まった小田の味発掘。これは、昭和五十五年のことである。県単事業で「ふるさとの味交流市実施事業」を小田町に導入し、その活動が始まったのである。小田町内各地から探索された小田の味は百四十五種にのぼり、小田の味のしおりとして集録発行した。その中のひとつに「じりたけの粕漬」があり、交流市・県農業祭等で展示即売したところ、好評を博したのである。これを機に小田の特産品づくりが始動したのである。



重藤 愛子 さん

●深山粕漬誕生

小田のイメージを漬物で表現するためには、しいたけの粕漬だけでは物足りない。そこで、小田の振興作物であるきゅうりと、山野に自生するウドを粕漬にして、三品をセットとして、小田の景勝地である小田深山にちなみ、深山粕漬として誕生したのである。

●量産への挑戦

しかしながら、ウドの粕漬の原料は、当初自生ものに頼っていたため、安定供給による量産はおぼつかない状況にあった。

丁度その頃、私の上司である大野清課長が昨今のウドの乱獲によって自生ものが消滅していくのを憂い、種子から二年で獲れる栽培法を研究された。私は渡りに舟とばかり、さっそく生活改善グループ

に共同育苗・共同加工を推進したのである。

このことにより、量産の目は立ったものの、生活改善グループでの取り組みも、いわゆる片手間的であり、特産品化への望みに一抹の不安を感じていた。

そこで、折角生活改善グループが積みあげてきたものであるが、

量・流通・商品化等勘案し、将来的にも飛躍させるために、グループが築いた礎をバトンタッチし、あえて生産と加工・流通の役割分担への道を開いたのである。

このことが、結果的には効を奏したのではないかと思われる。

それは、生産を生活改善グループだけでなく、他農業者にも呼びかけるために、農協で育苗をも引き受けてもらい、農業者への推進を図ったものである。

小田町ではごたぶんにもれず、兼業・高齢・婦人化は進む一方で、小田を代表する栗も放任というところも少なくなき、そういった



ころや水田転作物としても、手間のかからないうどを植える人も出始め、現在五ヘクタールにまで栽培されている。このうどへの取り組みがおもわぬ成果がありがた、量産はもちろんのこと、高齢者のいきがいや荒廃園・水田転作物対策等へ波及し、今後農協としても十ヘクタールにまで推進する計画を立てている。

これらを機に、農協では新しく農産物加工場を六十一年度に設置することにより、小田の農産物を活用した加工品づくりに拍車がかかり、ワサビ・フキ・ユズ・ブロッコリー等々他の産物の活用も手掛け、試作研究を続け商品化がなされている。

●販路開拓

販路については、郡内の観光地にターゲットをしばり、いわゆる域内自給から手がけ、農協管農指導課長自らが商売の売り込みに回っ

た。その後、各種イベントやふるさと宅配等にも顔見せをするようになり、あわせて自然食品・安全食品ということもあり、えひめ生協や有機農産生協・スーパー等でも取り扱ってもらえるようになった。

このようにあえて機能分担による取り組みとしたけれども、これの利点として次のことが言えると思う。

一、流通については、農協はお手ものものである。

二、生産者は生産に力を入れることが出来る。

三、青物と加工品への仕分けは相場により自由に操作できる。

(加工品用へは価格を定めているので、農業者は安心して生産できる)

四、臨時職員ではあるが、就労の場が出来た。等々で一応その成果は見られたのではないかと思われる。

●各事業とのかかわり

このように推進する過程において、手ぶらで事が起こせたのでは

なく、当初の発掘からはじまり、

次に商品化への研究には、ふるさと名物育成事業、施設には、兼業高齢者共同化事業、即売、消費者との交流にはふるさと市推進事業等いずれも県単事業とのかかわりの中で推進できたことは、ひとつのささえであり、事業そのものの趣旨にもあてはまったのではないかと思う。そして、果してこれがなかった場合、時代の流れといえども事の起こりがあったかどうか自信はない。

また今、これをさらに充実させるために、アグリトピア構想の中のひとつとして、小田町では加工施設・販売施設等も計画しており、これが実現のための自身の充実がいま力を注いでいる。

●特産品づくりへの思考

特産品づくりは、私の所属している上浮穴郡においては、比較的各町村ともに熱心に取り組んでお

り、生活改善グループ生産加工組合員によってささえられているところが多く、その実績は久万町の久万山漬を筆頭に各町村ともそれぞれに見るべきものがある。

しかし、小田町においては、グループが後生大事に守っていたならば、それは日の目を見るに至るにはまだ歳月がかかったものと思われる。

いわゆる小田の場合、一・五次産業とか、他もやっているように生活改善グループが始めたことだからとか等々に固執していたならば、折角のそれぞれの機能を発揮出来ないまま終わる可能性も潜んでいたのではなからうかと思われる。ただし、これは小田の場合であって、それぞれのお家の事情が異なるので一概にはあてはまらないし、切り換えることによって皆が恩恵を被ることを前提としなくては進まない。今後小田においても、生活改善グループ等がまた地

道な努力とセンスでもって台頭する可能性もありうるのである。

今後益々、自然・ふるさと・本物志向は進むものと思われ、そういった状況にこそ、その地の顔となりうる特産品の出現は必要であり、それを背負った者の役割は大なるものがあると思います。

だからこそ、農業者、関係機関団体がひとつになり、それぞれの機能を発揮して、地道ながらも一歩ずつ前向きに取り組もうとする姿勢の中からこそ、明日の農村農業の活力が生まれるものであり、これだから小田の正念場であると思えます。

●おわりに

このような一連の活動の中で、生活改善グループ員や加工場のおばちゃん達との試行錯誤の中での味開発研究・農協・役場の方々の情熱・協力で理解を賜わり、お手伝いが出来たことに感謝致したい気持ちです。今後さらに充実させるべく努力を共にしてゆきたいものです。

皆さんも小田の味ご賞味下さい。

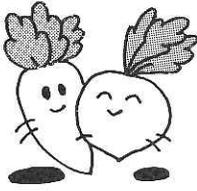




「産直と地域のくらし」

えひめ生活協同組合

大川 耕三



一、共同購入でくらしがかわる

《安心・安全なもの食卓へ》

「生協のハムは色は良くないけど安心ネ」「今日届いたりんで、無袋だから見かけはよくないけど味はいいのよネ」 生協の共同購入であつまった組合員の声です。

「安心できるもの、素性の知れたものを家族に食べさせたい」こんな願いで、いま多くの消費者が生協の共同購入に参加し、くらしの問題にとりくんでいます。

《自分たちの目で確かめた商品づくり》

一つひとつの商品の開発にも組合員が主体的にかかわっています。三年前にとりくんだ「産直豚」。飼料や肥育方法についてしっかり学習し、豚舎の見学や生産者との話し合いを何回も重ねる中で、多くの組合員が納得できるものが、やっと出来上がるといった次第です。

牛乳やたまご、とうふ、ヨーグルト、牛・鶏肉、ウインナー、かまぼこなどたくさんの商品が組合員自身の目で確かめられてきているわけです。

《昔ながらの井戸端会議が復活》 共同購入活動は商品の利用にとどまらず、主婦のコミュニケーションや情報交換の場にもなっています。料理のコツや子育て・教育問題など、若いお母さんには大切な「くらしの情報源」であり、昔ながらの井戸端会議が復活してきたという訳です。

二、顔とくらしが見える産直活動

《減農薬米へのとりくみで農民の健康も守る》



▲減農薬米収穫祭と交流会



「氏素性のわかった地場のおいしいお米が食べたい」 組合員の永年の願いが一昨年から「減農薬米」として南伊予農協との提携で始まりました。きっかけは、米の輸入自由化問題や減反政策など、農家や農協をとりまく環境が厳しくなってくる中で、「消費者に買うてもらえる米をつくらなにかん時代」という認識が広がっ

てきたことに加えて、農家自身が農薬で健康を害するという深刻な状況があったからです。

一年間の試験栽培の結果、「手間がかかり収量は少し減るが、農薬の害をおさえることができるし作柄は悪くない」ということから現在、南伊予農協管内水田の二五%・七五haに広がり、一三〇戸の農家が参加し、「減農薬米は労働時間はふえるが、農薬代は減らせるし、稲づくりが充実した仕事として楽しくなってきた」という話があちこちで聞かれはじまりました。「この南伊予農協から、日本の農業を守る運動が始まっていいじゃないか」。組合長のこの一言に、消費者とともに歩む農業への確信がこめられています。

《消費者とともに安心できる農業をやりたい》

「せめて生産費がまかなえるかたちでつくりたい。わたしらは農業を守って生きていきたいけんネ」。農家の切実な願いと生協組合員の「おいしくて安心できるものが食べたい」という声が一つになって

愛媛産直センターとのとりくみが始まって五年。伊予柑・みかんから出発してキャベツ、ほうれん草、ネギなどの葉野菜にも広がってきました。

松山市近郊の野菜グループは、生協組合員の注文の大小に悩まされながらも、生協との産直について次のように評価しています。

「市場価格は変動が大きい。その点、価格が前もってきまっている生協との取り引きは有り難い。私たちは、市場の相場にあまり左右されない価格体系で安心して農業をやりたい。そのためには、生協の希望にそった安全な品物を作っていかなければなりません。」

長いつきあいの市場との取り引きをしつつも、生協との産直をやるというのは難しいこともあるようだ、それでも「生産費をまかなえるような形でつくりたい、私も農業を守って生きていかんならん」という思いが産直をつづけていく契機になっているようです。

三、消費者とともに

地域を開く産直へ

《川下のニーズを川上に生かす》
農家や農協は従来「作ったものを売る」というのが事業の基本でした。それが、消費者のくらしの変化や農産物の輸入自由化の波がおしよせてくる中で、いま、大きな曲がりかどを迎えています。



この十年間の生協活動の飛躍的な発展に見られるように、消費者のくらし（ニーズ）は大きく変化しています。ひと

つは「安全性志向」、それから「本物志向」、そして「安心（感）志向」です。この「安心（感）志向」が産直へのとりくみとして発展している要因です。作る人の顔とくらしが見え、その中に自分たちも参加できるということを通じて、商品への信頼感が高まり、利用につながります。

生産者もまた、産直を通じて消

費者のニーズが把握できることにとどまらず、食べる側の顔とくらしがわかることにより、農業にもハリと展望がでてくるのではないでしょう。

《地域づくりの視点をもって》
生協の産直活動は、単なる流通合理化という側面にとどまらず、地域にとってさまざまな効果を及ぼしてきました。

三内農協和田丸有機グループとの野菜セットのとりくみは、若妻会を中心として部落全体がいきいきとなるきっかけをつくってきましたし、久万町農産加工センター



和田丸有機グループとの交流

との漬物の産直を通じて、町の生活改善グループの改善づくりや高齢者の雇用の確保にも役立っています。

また、県内各町村でとりくまれている「まちづくり、村おこし運動」の一つとしてとりくまれていく特産品づくりが、実は、販路が必ずしも確立していない問題があります。生協との提携を通じて新しい展望が開けつつあります。村の特産品が消費者と結びつくことを通じて村の活性化につながる、消費者もまた産地のくらしや地域の有様を理解することができます。

このように、産直とはくらしや文化やさまざまなネットワークをつくり上げるといえるすばらしい活動となって発展してきています。消費者は産地のくらしや人間を理解することができ、生産者は消費者のくらしもわかり、自分たちが住んでいる地域の将来について真剣に考えることになりました。お互いの「顔とくらしがわかる」、これが産直のもっとも大切な点ではないでしょうか。



生産と流通 暮らしの中から

編集事務局

● 地域の生産を めぐる動き

最近、県内でも各地で特産品開発センターや農産物加工センターのような拠点方式による地域生産物の付加価値づくり、流通開発が盛んに行われている。このほか、ふるさと宅配便、オーナー制度、あるいは体験農園や観光農園など、地域サイドの取り組みや生産者からの情報発信の実践例も多くなってきている。

また、生活改善グループなどの自主的活動では、身近な生産物を加工したり、農協・商工会など地域の各団体と連携することで、朝市や日曜市も盛んになってきている。

● 流通環境の変化と 生産・暮らし

生産と流通の関わりを考えていくうえで、まず、流通環境はどのように変化し、地域の生産と暮らしに影響を与えてきたかを少し振り返ってみる必要がある。

大量生産、大量消費が促され、物的豊かさが追求された高度経済成長の流れの中で、流通市場においても高速交通網の整備や予冷技術の発達などを見た。このような消費形態と流通環境の変化は、とりわけ生産の現場である農山村の生産形態や暮らしのあり方を変えていった。それは、生産物の換金化を促し、作付けなどの単一化による生産団地形成を可能にする一方で、暮らしは都市化され昔ながらの自給自足経済を崩壊させ、産地間競争といった新たな問題も浮

かび上がらせた。さらに近年では画一的な土地基盤整備や、生産物の必要以上の均質化や兼業化の進行で、省力化による農薬汚染など環境問題が問われるようになってきている。



つぎに、量販店など末端流通業界はどう変化したのか。それを見る指標となるのは、日本の社会構造が都市型生活を志向し成熟化していく中で、食生活においても量から質に対する消費者自身の要求がますます深まっているということ。もちろんである。その中で、業界自身も激化していく販売競争に生きぬいていくための基本姿勢とし

て、この流れを販売戦略の中に組み込んで来ている。さらに、消費者自身の価値観の多様化から商品寿命も短くなり、新たな需要の掘り起こしのために、マイナーな地域の生産物にも目が向けられるようになってきているのも事実である。

● 生産の現場が 持ちたい視点

では、このような環境の変化の中で地域の生産をどのような視点で捉え、生かしていけばよいのだろうか。

それは、従来型の市場原理に基づく産地間移動型、単一、大量流通型の市場流通のみに依存したり、都市生活者はもちろんのこと、生産の現場である地域自身が暮らしの中でこれまでの都市型消費を続けていく限り、解決し得ない様々な要因が都市、農村部を問わず消費と生産の現場で現われてきている。それをどうすれば主体的に解決していくことが出来るかを、もう一度、暮らしと生産のあり方

から捉え直してみるとという視点を持つことではないだろうか。そうすれば、現在取り組まれている各地の様々な活動が、何を意味し、どうして行かねばならないかが自ずと明確になってくるように思われる。

このような視点を持ちながら、地域の生産を生かしていくうえで、これから解決しなければならぬ要因をどのように受け止め、考えていったらよいのだろうか。



たしかに冒頭に挙げた一連の活動は、地域の生産に自らが主体的に働きかけていくことによって、その付加価値の増大と地域雇用力の確保といった地域経済の活性化がねらいの基本にあり、あわせて地域の情報発信やコミュニティー

づくりといった役割も果たしている。しかし、地域経済の活性化という面から見ると、一部先進地においては、その独自性と長年の努力の結果によって成果を収めている事例もあるが、現段階ではその多くが、生産→流通→(拡大)再生産といった経済の流れを創造し、地域を支えていけるような仕組みにはなり得ていないのが現状ではないだろうか。この生産が抱える経済性の問題をどう克服していくかは、事業として投資している以上、避けて通ることの出来ない切実な課題である。そのためには、まず、流通市場そのものを正しく理解することが必要であろう。それは、末端流通市場との情報のパイプを密にしていくこと、消費の現場を自らが知ることはもちろん大切であるが、忘れてならないのは、商業的ブームの中で、新たに創り出された「ふるさと志向」の名のもとに、もうひとつの市場に振り回されないことである。

また、生産物そのものの安全性、健康志向といった消費者運動の高

まりとともに、生協を中心として暮らしの側からの生産が求められるようになってきていることである。とくに農業では、生命を維持する食の分野という認識から、無農薬や有機栽培といったエコロジカル農業への取り組みなど、生産者サイドの実践例も多く、このような時代の流れを受け止めながら、生産物にどのような付加価値を与えて行くかということも大切なことであろう。

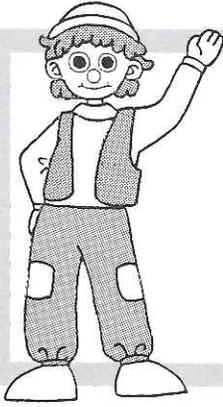


● 暮らしの中から

さらに視点に持ち続けたいのは、生産の現場である地域の中でも、生産者自身が生活者であるという

意識である。その意識の高まりが、自らの生活を自らが消費していく域内自給や、地域に残る食の文化の見直し発展させていく運動、先産の価値や喜びを再び自らの手に取り戻す運動など、様々な形となって現われているように思われる。そして、このことが地域の中に生産を生かし、本当の意味での暮らしの流通を拓いていく道につながっていくのではないだろうか。

地域づくりが各地で叫ばれて久しいが、それが自らが地域を創って行く自立の運動であって、よりよく生きていくためのものであれば、生産もまた、現場である地域の私たち自身の暮らしの中のもっと身近なところに位置付けられる必要がある。そして、さらに広い意味で暮らしの中に生産を生かし続けていくためには、生活や生産の場である地域の環境そのものについても、もっと真剣に問い続けていく必要があるのではないだろうか。



地域づくり 文化フォーラム'89飯田

(財)愛媛県まちづくり総合センター
石川元英



県外研修で訪れ、うしろ髪の引かれる想いで発ち去った町「いいだ」。再訪の機会を狙っていた私の願いの強さが神に通じたのか…？

人形劇人と全市民との交流の場、人形劇カーニバル'89飯田の初の試みとしての「地域づくり文化フォーラム」が約四〇〇名の行政職員、芸団協、住民の参加で行われた。

「文化」を見直し、人形劇を市民文化として定着させるには住民・文化団体・行政が、どのように絡み合って事業をすすめていくのがいいか？「文化」を中心とした地域づくりとは何か？という趣旨のもと、熱い討論がなされた。

△パネルディスカッション▽

—全国各地に学ぶ—

全国各地でユニークなイベントやまちづくりを成功させた先駆者の経験と知恵で、「文化とは何だろう」「地域にとっての文化とは」についてそれぞれの想いがぶつかりあった。「文化」とは、みんなで楽しむ事じゃないのか…。みんな

で誇れるものを持つことじゃないか…。人と人をつなぐ事じゃないだろうか…。という提案。

これからの文化は、地域にこそ本当に育つ、地域、地域での踊ったり、歌を歌ったりの普段の生活のなかで育まれる。

民俗、歴史のほりおこし、郷土芸能の復活等、地域に昔からあったものの呼び起こしが、文化であり、人と人とを結ぶ地域の文化活動となる。

物が豊かになりはしたが、何か虚しい、何か物足りなく生活を繰り返す。人の過疎よりも、この心の過疎化の進行のほうがよくないと恐い。この心の過疎をくいとめるための文化の意義は大きいと思う。



△事例報告▽

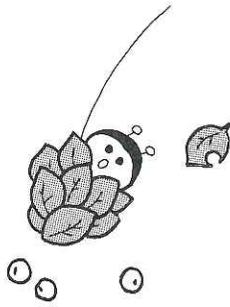
—飯田からの提案—

今田人形の高校生の遣い手、前



“こんにちは！”
“お人形が
しゃべった!!”

田美可さんより、「人形を操っている間に人形がひとりりで動きだし、まるで生きもののように人と同じような動きをする。言い尽せない人形の魅力、すばらしさを体で感じながら、この人形の魅力を



少しでも多くの方に広めたい」。素直な気持ちの伝わる報告があった。

この高校生の女の子のように子供の頃から人形劇に接してきたことで人形の歴史、飯田の歴史を学び、人形を愛し、飯田の町を愛することに繋がっていく、人形劇という文化を通して子供たちが育ってきたことは、飯田の人形劇が10年を越え、やっと市民に根づいてきた結果であるし、いろいろと与えてきた影響のなかで一番価値のあることであると思う。このフォーラムの一番の成果(目玉)といってもいいのじゃないだろうか？

▲基調講演▼

「地域の活性化と文化」

木村 尚三郎
(東京大学教授)

今の時代、どうして「文化」という言葉がしきりに叫ばれ、大きな関心もたれるようになったのだろうか？

以前は、文化というと地方の自治体はあまり参加しながらなかった訳であり、なによりも橋を架けたとか、道路づくりが大事だと言われていた。それが、むしろ積極的に予算を組み文化会館を建てる。何がどう変わったのだろうか？

この点を「文明と文化の違い」をひもときながら、間髪いれずの笑いのなかでユーモラスたっぷり聴衆を魅了(本当に東大の先生かしら…?)といった声があちこちで聞かれたし、文化による地域の活性化を訴えた。わたしたちの生活が、明治以降物質文明の追求、技術文明を追求してきて、表面的には、あらゆる充足、満足のなかで生活をしている。しかし、今は

昔のように一つのものを買うたびの感動、喜びが薄れてきた。無感動、無関心、人としての本当の豊かさとは…が問われている。

「誰もが人恋しい想いで生きていく未来が見えず、寂しいわけです。その傾向は特に若い人達に多く見られる。若い人達の方が迷信深く、縁起をかつぐ」このご意見には、同じ若者として大きくうなずいてしまった。(「青春をかえせ!」と……?)

このような時代背景のなかで、人々が求める「文化」への要求は、

- 一 コピー、偽物はいらぬ本物志向(地域にしかないもの)
 - 二 自らの手・足・頭を使い創造するもの
 - 三 心底楽しむものである。
- これらを通して、まず友達がほしいのである。歳をとっての一人暮らしは寂しい、お互いに楽しく生きるために多くの友人がほしいのである。

そして、明るい雰囲気＝明るさ

と、いい香り、いい音への要求も高まっている。

だから、それぞれの地域が頭を使って考え、手足を使って行動していく。そして、皆が本当に楽しめるものを創造していくことである。

これからの時代は、物、金のがむしろ追求のなかで忘れ去ってしまった。「自分というもの・本当の豊かな生活」を思いかえし、生活の中で真に必要なとされる「心の豊かさ」が求められている。

真夏の八月、生まれて初めての人形劇を公民館の暑い片隅で観劇。人形が思うままに操られている姿は、子供たちを釘づけにしていた。理屈ではない。劇人の心が人形の心も操り、さらに、子供たちの心までも…(私の心も)

心のない愛のささやきが長続きしないように…?

心のない施設、行動、言葉からは何の感動もなく、明日の地域が創られていけないことをあらためて感じさせられた。

いい日 いい人 いい出会い '89 まちづくり人のつどい

(財)愛媛県まちづくり総合センター

豊田 渉

「犬も歩けば棒に当たる。人が歩けば人に当たる。」右を見ても左を見ても人また人。ここがああ超過密都市「東京」。何回来てもいつも思う。これだけの人が、一体どこから来てどこへ行くのだろうか。全部が全部そうでないにしても、東京の人は街のことを知らない。無駄だとは思いついながらも、「銀座四丁目はどういけばいいですか」と尋ねても、「知らない」という。実際には、数百メートルのところでした。この人が、東京で初めて声をかけて出会った、最初の人だったのに残念。

九月二日東京・青山で、全国から「まちづくり人」と言われる人たちが集まった。名付けて「'89まちづくり人のつどい」と言う。このつどいを企画したのは、まちづくりの世界では、名だたる人々二十人の「出合いのプランナー」の手によるものである。

●講演「まちづくり未来戦略」

新潟県安塚町長 矢野 学

まちづくりについて、自分なりに考えてみたい。



①これからは「地域経営の時代」であり、地域の経営的感覚、ものを養っていく、または、いろんなノウハウを吸収していく町民が、地域ごとに生まれてこなければいけないのかなと思う。

②自然景観をどう守り、どう活かすか。何もしないことも景観づくりかもしれないが、農村のアメニティ要素で景観を守ることが必要なのかなと思う。農村という意味

では、自分の田を自慢できるような、アメニティをつくっていくこともその一つだろうと思う。

③地域文化創出の時代。いろんな史蹟が地域にあるが、それ以上に人間性の文化を大事にしたいということ。たとえば、その町に行く心がなごむ人がいるというよう

④地方自治確立の時代。いま、日本列島全体が東京を向いている。地方自治がなくなっている。住民自治を忘れていいのかとも思う。

私の町と隣の町は違うのが当たり前。お互いの町が切磋琢磨して成長していく。これが日本中にあればいい。いま一度、住民自治を考えてみたい。

⑤企業との交流。地方に目を向ける企業や文化産業に出資する団体がほしい。企業と行政の交流をもっとはかるべきだと思う。

地方や都市など関係なく、まちづくり的な発想で全国にネットワークをもつと素晴らしい。是非「まちづくり派」になってほしい。行政の中にいるからではなく、その町に住んで活動すること。それ

がまちづくり派の最たる方々だと思ふ。政治は開かれたものであり当然、そういう人たちが首長になり、議員になり、職員もまた地域にかえり、いろんなことができる「まちづくり派」がいっぱいいることが、これからは必要じゃないかと思う。そこに、まちづくり文化あるいは日本の特異なまちづくりの発想が、日本全国の中で生まれてくるのではと期待したい。

●第一の出会い

「首長にならなきゃ意味がない」
★まちづくりとは命懸けで、何かに賭けることではないか。身体をはってくれる先輩や友人がいたことが支えで、出馬するきっかけとなった。

★昔の首長なら行政の手腕があればやれた時代だったが、今は完全に首長は経営者でなければ、自治体はもたない。

★厳しい選挙の中で、職員の気持ちをふるいたたせることは必要なこと。いつもトップに立つ人が気構えを示さねばと考える。

★首長にならないけれど、地域に足がすべてではないが、地域に足を

去る九月一日から三日にかけて熊本市で行われた同会議・学会には熊本県内、県外から自治体職員、関連する研究機関、大学人など、七百名近くが参加した。この学会は自発的な手弁当の集まりだけに、全国的に活躍している識者も多く、門外漢の私には非常に学際的で華

あすの自治体を

語る……

—第六回全国自治体政策
交流会議・第三回自治
体学会からの報告—

(財)愛媛県まちづくり総合センター

幸地 慎一

やかでもあり、まさに自治体関係者の年一回の祭典であるようにも感じられた。

政策交流会議は、近年、全国の自治体において事前の政策の必要性が高まり、自主研究グループの相次ぐ中、昭和五十八年に横浜市で第一回が開催された。政策をタ

イトルとして、自治体職員が自己の研鑽とヨコにつながることによって中央省庁への政策支配への牽制を意味すると同時に、自治体以外の立場の人たちを含んでの交流の意義も大きい。今回は開催地熊本県の主張でもある「まちの魅力と地域の活力」、並行して行われたシンポ・研究会では、時代の要請としての「地域活力の掘り起こし」がテーマであった。

● 政策研究交流会議

地域が、まちが魅力的であることには、経済や効率だけでは量ることの出来ない心の豊かさが求められるようになっていく。

ここでは、本当に「任んでいいまち、ときめきのあるまち」の追求が自治体政策の大きな課題としてとりあげられた。

◇基調講演(要旨)

南條道正氏(都市設計家)

都市には「仕事」と「暮らし」という、人が定着する基本的な要素があって「人」が集まる。そして時間が「ひらめき」という開発

力を生む。この四つの要素をどのようにコントロールするかが政策のポイントである。まちは生き物であり、安定平衡を志向しながら新たな機能を持つことで自己変革をしようとする。それは挑戦の世界であり、ここで好奇心と満足感が得られる。このような変動型のアメニティーを考えていくことが「ときめきのある」まちづくりである。

そして様々な局面でそれをビジュアルに表現していくことである。それは「わかりやすさ」という安定平衡の世界ではなく、人の興味をかきたてる、ある種の「わかりにくさ」であるので、人にそう思われるためのお芝居も必要ではないか。

◇パネルディスカッション

ここでは「まちの魅力と環境デザイン」と題し、現在、熊本県が進めている「アートポリス構想」をかなり意識しての内容と思われるが、建築・土木の専門的視点ながらも、地域性や文化、さらには国際性までも意識した、非常に興味深い内容であった。

以下に環境デザインについてのパネリストからの発言について要点のみ紹介する。

【環境デザインの現状】

環境とはストックされる要素を持っていくが、デザインの面では日本ではこれまで衣食住の基本的欲求の充足が優先され、ストックになり得ていなかった。しかし、これからの社会環境の変化の過程で、デザインは地域文化の中に創出されていくだろうから、環境デザインも量から質への置き換えをし、ストックしていかねば文化的色彩を帯びてこない。

【環境デザインと行政】

二十〇二五年続いた高度経済成長期では、公共建築物は、早く、安くということによって標準化されて来た。しかし、住民自身がゆとりや個性を要求し、新しい環境デザインを取り入れることで、逆に事業が進め易くなって来た。ただ、行政がそれを性急に実現しようとするあまり、また同じような目玉商品主義的環境に対する危機が現われようとしている。

【地域性、文化と環境デザイン】

○文化とは自然に身につくものではないし、その独自性と創造性は混同されるべきでもない。このことの理解と認識が重要。日本人はこれからも都市化するであろうから、均衡を求めながら到達できず移りゆく都市のメカニズムの中で、環境デザインによって創造される空間的、人為的インフラを保存修正し、新しいものを生み出す糸口をつかまねばならない。

○アートポリスではソフトのアイデアを駆使し、建築を通じて既存の環境デザインの在り方を壊していくということが、地域性や文化と関わりが無いところで行われる。しかし、それを理解し吸収していく意識こそが地域の文化環境であり、その仕組みを創っていくことが日本文化の試練でもある。

【環境デザインの果たす役割】

○ひとことと言えば、カオス（混沌）の中に何らかの秩序を創っていくこと。その双方を結ぶためにはカオスとは何かを調査分析していくようなプロジェクトが必要。

○これからの情報化社会では、調和や秩序は簡単には生まれないと予想される。従って、デザインという公的な部分を抱えているものストックでは、長い時間をかけて地域性や文化といったカオスの中に秩序をつけていくことだ。

●自治体学会・シンポ・研究会

二日目は、地域活力の掘り起こしというテーマから、二つの問題提起があったが、その方法論としての「地域資源の保全と活用」では、新しい都市と農村の関係から、交流の意識、農村景観、アメニティを視点にそのあり方を問う内容だったので、私には非常に関心もあり身近に感じた。

◇問題提起（要旨）

進士五十八氏（東京農大教授）

地域資源の保存と活用とは、イギリス風景式造園に見られるように、どんなに環境の悪いところにもキャパビリティ（可能性）がある。その土地独自の歴史、自然、文化という資源をどう生かすかがポイントである。

日本の名園の原形ともいわれる中国の西湖では、洪水から地域を守るための治水対策という必然性から始まり、世界の観光地になった。我々が求める観光は、そのいくつもの段階にある可能性をいかに引き出していくかである。

また、都市と農村の交流の問題も地域の活力の為にあるのだが、日本の国土を支えているものが大切だということを基本に押さえてほしい。その国土を支配しているのは「農の風景」であり、それを支えているのは、知らず知らずに国土を管理している庭師たる農民なのである。都市民は、野性の自然を改良して造った田園景観を維持し、自らの環境の為に農村を

支えなくてはならない。

近年、都市型の整備が進みゆく中で農村地帯にそれが浸透し、農村らしさが失われつつある。都市と農村はあくまでも「ハーフ・ソサイエティ」であり、とりわけ人間として大切なふるさととは、魅力ある農村でありたいものである。

農村地域の特徴は、地面の間から、地質・地形・植性・地理といったものが生活の中に重なり、景観の本体がダイレクトに表現されているので、その違いは、土地・自然に密着すれば必ず明確になるし、農の有り様によっても多様性を示す。従って、あらゆる地域の自治体にとって観光資源がないからということとは無関係に、その地域「らしさ」を追求できるはずである。



そこで大切なのは「材料」である。四全総で多極分散がいわれ、すべてが都市との対比の中で行われようとしている。今こそ時間に絶え得る材料を使い、劣化が進みつつある農村景観に自らの地域の本質を見極め、プライドをもってキャパビリティをのばしてほしい。

◇事例発表・討論

第五分科会では問題提起を受けて、全国各地で実践されている六つの事例をもとに、都市との対比の中で、いま農村に求められる魅力、アメニティーに関する地域の環境・景観・保全・整備のあり方が紹介され、討論された。

【都市と農村の交流】

福島県三春町と東京都中野区および、群馬県川場村と世田谷区の交流では、経済優先や形式的に終わらない民間レベルの交流の原点の大切さと、村が活性化し、自立していくために都市側として何が支援できるかが発表された。

これに対し、都市の人間の量、情報量の格差に萎縮しないために

も「これが農村のアメニティー」といえる誇りを農村側としてどう創っていくかが問われた。

【農村の魅力の創造】

引き続き内子町の岡田文淑さんからは、農村アメニティーに対する農山村住民の景観意識という視点から、調査をもとに発表があった。

この中で岡田さんは、環境改善を仕掛ける側の動きと住民の動きが必ずしも一致しないこと。また、経済優先か、環境の改善かといった問題が現実にある中で、地域の人と話し合いながら両立していくことによって、都市から声をかけてもらえる環境を創りあげていかねばならないことなどを指摘された。

熊本県小国町の宮崎町長からは、「悠木の里づくり」によって若者の残る魅力づくりとは、地域独自の技術開発と、それに基づく地域デザインによって個性ある農山村文化の創造が基本であると発表された。

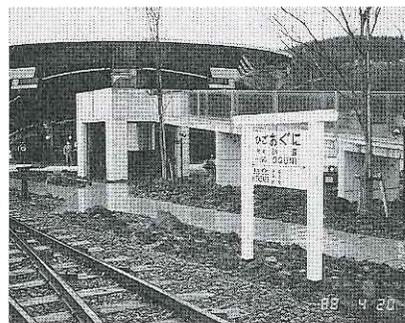
また、討論の中では、学会全体

を通して、とりわけここでは都市と農村の交流など、都市の論理で農村が見られており、農村から見たものの捉え方はどうあるべきか、との質問があった。

これに答えて、宮崎町長は農村においても時代の要請を、技術や環境に積極的に取り入れるような動きを創造していくこと。岡田さんからは、町並み保存運動をおして、どちらかといえば劣悪な生活環境の中で、行政と住民が生活環境の改善と保存を進めるには話し合いが不可欠としながらも、今だに道路が唯一の課題というのが現実の中で、若い人たちが暮らせる環境になっていくために、行政として何が出来るかを模索しているのが現状と答えた。

事例発表の時間が長く、もう少し、討論を深めていく時間がほしいと感じた会であった。交流・景観・環境改善、独自の技術と農山村を活性化していく切り口はいくつもあるが、大切なことは都市・農山村にかかわらず、そこに住む人が、どれだけ地域を創造し自立

できるかと同時に、お互いが思いやるころだと思う。



小国町の玄関 ゆうステーション

最終日となった小国町遊学ツアーでは、「ゆうステーション」「小国ドーム」「木魂館」などを見学させていただいたが、農山村にとって技術とはなにか、施設とは何か、独自の文化をどう受け継ぎ発展させていけばいいか、地域にとって人材はいかに尊いものであるか等々、教えられるものが数多くあった。印象深いのは、夢をもって、しかも冷静に、論理的に地域の将来を語られている宮崎町長さんと、とりわけ意気込みを感じさせず、楽しく案内いただいた町職員の皆さんの姿であった。

十人会

三瓶町

前田 剛志

三瓶町の発展を願い、地元で頑張っている「十人会」の熱き思いや、活動の一端を紹介したいと思います。

今や全国的に町村の活性化のため、村おこし・町おこしに力を入れており、我が町でも商工会青年部、4日クラブ、青年漁業者協議会、連合青年団などが中心になって『海の祭典』等を行っており、二十一世紀を担う若者が、一つの事業を通じて、町の活性化に取り組んで何度か話し合いの場を持った時、色々なアイデア・構想が生まれてきました。「二十一世紀に向かって、新しい三瓶の方向を新発見しよう!! 我々の時代はもうそこまできている。今、行政、商工会、農協、漁協等も、町の活性化に力を入れている。微力ながら若者も一緒になって活性化に取



摂津 兵頭 前田 三好 畠山
山崎 宮中 水野

り組んでいこう」というスローガンのもとに、後継者団体の中から、活動しやすい程度の十名に絞り出発する事になり「十人会」と名づけました。今後、一人二人と輪を広げて行く予定です。

月に二〜三回の会合を重ねて行くうちに、町おこしとは? 活性化とは? 色々な意見の中で、「まずは産業おこしから取り組んでいこう。一次産業の発展、商工業の発展、そして、それらが町の活性化につながるのではないか。我が町の経済を考えると、農業・漁業の発展なくして、商工業の発展はないのではないか……。」

元気印レポート

調べて行くうちに、残念なことですが、町内の特産品の流通問題、商いの未熟さで他県の特産品として流れていることを発見しました。例えば、ニューサマーオレンジは高知県に、生ウニは山口県に、養殖魚は香川県に、そして、沖合沿岸漁業は八幡浜にと……他県、他市の特産品として、全国に流れているのです。この点を見直し、三瓶の特産品を直接京阪神に向けて発送すれば、産業構造も良くなるのではと、大阪方面に視察研修に行きました。

大阪中央卸売市場、天満市場、百貨店、団地、都会の消費者は何を求めているのか。卸売価格は? 小売価格は?……具さに調べて行くうちに、都会と田舎の価格の差の大きさにビックリ!! 何と一番驚いた事は、我が町では不用とされていた魚が、高級魚として高価格で取り引きされているのです。魚の名前が地方によって異なるように、好みも違っているのです。「これはいける」流通を研究していけば、我々十人会のモットーで

ある「消費者には安く、生産者には高く」も夢ではありません。宅配業者との提携による産地直送や三瓶マークの産品パッケージなど、少しずつではありますが、成果が上がりつつあります。

しかし、何事も事を起こすには幾つもの障害にぶつかります。

昔からの取り引きの問題、我々若者の意見に、今の経営者がどこまで取り組んでくれるか壁は厚く多い。その壁をひとつひとつ取り除いて、一人でも多くの理解者を作って行こうと努力しています。

十人会が発足して一年、産地直送販売の商社も、十人会のやる気に協力してくれています。目標は一步一步確実に近づいています。

私達は、自費で運営しているので大きな事はできませんが、小さな波がいつかは大きな波に、そして、三瓶の波となり、全国に向かって成長していきたいと思っています。我々十人会が、三瓶の活性化のプラスになる事を夢見て、今後も勉強会を重ねて行く決意です。

生名村

かわら版

ろくそく塾

から

いきな人たちの
いきな人より

人口二千七百人、広島県との境の村、生名島がいま元気で、因島の造船不況で沈みがちだった村では、フオーラム、マラソン、スイムラン、などの各種イベントをおとしているんだ。動きが盛んになっています。そんな村の中で、特別にきまりをつくらず、誰でも何でも自由に語り合おうと一年半ほど前に「ろくそく塾」が発足しました。ここでは、塾の皆さんのかわら版の中から日頃の想いの一端を紹介させていただきます。

いきな人より……その1

「ボランティア……?」

いま、生名村でボランティアといえば、最近ではスイムラン大会の実行委員をはじめ、この大会に関係した多くの住民のことが思い浮かぶ。大会が開催されるまでの間、何度も寄って話し合い検討した実行委員会の方々とはもとより、大会当日ボランティアで参加したたくさんの人々の協力により、期待以上の成功をおさめることができたと思う。誰か手伝ってくれた人居ませんか」というボランティア募集の方法は、生名島一周マラソン大会から試みられ、今度で三度目である。生名村の人たちも、どうしてどうして、すごいじゃないですか。

それからもう一件、ボランティアといえ、日本青年奉仕協会から派遣されて生名村で活躍している玉腰君が居る。愛知県の一宮市からこの島に来て四か月足らず。数多くの人とのお会い、今まで出くわしたことの無い数多くの経験

元氣印レポート

は、彼にとって毎日が目まぐるしく変化する日々であろう。一年間という短い日々であるが、せっかく生名に任んで生活したのだから何か足跡を残してほしいと、原住民のわたしなんぞは身勝手なことを望んだりする。

先月の夏期大学の時、愛媛大学の讃岐幸治先生と雑談をする機会を得て、その時「ボランティアとは何ですか」と質問したら、先生曰く「ボランティアは権利なんですよ。」と話された。ちょうど玉腰君も居て、先生が「君はわかるだろ。」と言われ、彼もうなずいた。勤めていた会社を辞めて、一年間ボランティアとして愛媛の小さな島で、自分の知らない自己を発見し、主体的に生きることに挑戦していることは、彼にとって権利なのである。

ボランティアという近頃では、無報酬という言葉にすり変えられ、美名のもとに義務感をもって行動する(あるいは行動させられる)場合が割りと多いような気がする。あまり乗り気でないのに参加した

り、自分の都合を犠牲にしてまで参加したりする場合もある。まわりの冷やかな目が気になり、強制ボランティアになってしまうのである。人にはそれぞれ生き方・考え方が異なるのに画一的に押しつけたら、意識せずとも集団心理の作用でボランティアが行われるとしたら決して長続きしないであろう。多数決はボランティアの敵である。ボランティアは、強制でなく共生なのである。

自主的ということは権利の行使であるのだから、参加して楽しく充実感があり、そしてさわやかな汗が流れ、ちょっとした自己満足に酔うのである。そして、「何の為にやるのか目的がはっきりし、そのための自分の役割は何なのか自問し、自ら「やろう」と思った時、自由を味わった瞬間であり、「自由人いくさびと」になるのだ。」と五十崎の戦士は語る。ボランティアは自由追求の権利だとわかった。そして、場作りを計画するリーダーは、参加した人々が自由追求の場として活躍できる舞

台をできるだけだけ設定する気持ちが必要であろう。

(村上 寛仁さん)

いきな人より……その2

——私のつぶやき——

ハスイムラン大会を終えてV

台風通過で強風の残る中、第一回のスイムラン大会が無事に行われた。トライアスロン、バイアスロン、スイムラン……言葉では聞いたことがあるが、まったく想像がつかない。

そんな中で実行委員長に主人がなったから、さあたいへん。普段でも夫婦の口ゲンカが多いのに又、増えたみたい。

とにかくビデオを見たり本を読んだり……でもよく分からない。徳島県でスイムラン大会が行われるというので、実行委員会の数名が行くという。成り行き上私も一緒に連れていってもらおう。

前夜祭のカーポパーティ、競技大会を見せてもらう。『百聞は一見にしかず』というが、この見学はまさにそのとおりであった。

それから一カ月後、とうとう『いきな島いききSWIMRUN大会』が行われた。関係者の盛り上がり、いまいちのようだったので前夜祭の準備、料理、大会のボランティア、村民の応援、大丈夫かなあと心配だったが、どうしてどうして、すべて素晴らしいものであった。

出場選手も関東、関西、九州、山陰、近くの県市町村からも時間にはきちんと揃っているし、すべて予定どおり進んでいく。全員の力の素晴らしさには感動した。

大会が済んで実行委員の人が「やっ普通生活になり、家族から不平を言われなくなる。」と言っていたが、イベントを実行するのは全員が大変だったなあと思つて思つた。

私達も夫婦で意見の衝突もよくしたけれど、おいしい寿司でも食べてカラオケのマイクを握って慰勞会をしようかなあ。ねえお父さん!

(浜田久美子さん)

元気印レポート

いきな人より……その3

拜啓 かわら版

ろうそく塾 殿

毎回、かわら版を届けてくださってありがとうございます。大変楽しく読ませていただいております。このかわら版を読んでいると、同級生、そう、同級生という懐かしい仲間を思い浮かべるのです。それは、特定のだけかれではなく、それは、小学校の遊び仲間であったり、中学校や高校の頃、いろんなことを自由に話し合った仲間のような……

わたしは、生名の生まれではありません。生名へ来たときは二十二歳で、すでに大人でした。そして私は「正祐さんの奥さん」でした。ズーッとそうでした。

ろうそく塾は、なんにもやらない塾では決してありません。

私などは、一度も塾に参加したこともなく、ただ、かわら版の一読者にすぎませんが、ろうそく塾、そこから吹いてくる風に吹かれて、目をさましたり、また、心地良さ

にまどろんでみたり……何より私は「正祐さんの奥さん」から「村上京子」に脱皮したのですから。

上下の関係もなく損得の関係もなく、何かをきっかけにネットワークが広がっていきます。私は、三十代の終わりになってやっとひとりの人間として歩き始めたような気がしています。

次回、かわら版 ろうそく塾を楽しみにしています。

(村上 京子さん)

第1回 いきな島
いきいきSWIMRUN大会要項



夏も終わりに近い八月二十六・二十七の両日、久万町の上浮穴産業文化会館を舞台に、『市町村の振興基本計画を考える：』シンポジウムが開かれました。

今回のレポートでは、このシンポジウムで課題提起や司会等を担当された方々から、その感想なり提言を「紙上フォーラム」的に掲載することといたします。

読者の皆様からも、新たなるご意見やご感想をお寄せいただきますことを期待してやみません。

企画行政の在り方に

目を向けて

内子町 岡田 文淑

今、多くの自治体で「総合基本計画」策定のプロジェクトが進んでいる。大森彌教授の弁を借りれば、市町村にとっては十年に一度の一大イベントである。それぞれの自治体の担当者にとって、これほど判りにくい仕事はないかも知

紙上フォーラム ミニ・シンポジウム 『市町村の振興基本計画を考える…』かお

れない。なにしろ通常の役所事務と異って、「ゆり籠から墓場まで」、住民のくらしのための条件整備に始まり、自治体のアイデンティティ＝自己の存在証明を創造し、これをトータルして「地域づくり」と呼ばれる計画を、十年という長期にわたって策定しなければならぬのであるから大変である。

多くの自治体の第二次総合基本構想の策定が五十年代前半に改定された。この時期はまだまだオイル・ショックがあったとはいえ、経済成長期の余韻が強く、インフラを含めた環境整備がメインであり、質より量といった価値観があったと思う。従ってこの時期の計画は、地域の近代化を目指したハード事業が優先しても、住民も行政も違和感を感じなかったであろう。そして、これらハード事業が目標として基本構想の目玉になることで、策定作業が成された感じがする。

この過程には、近隣の類似

成果を収集してマニユアルとしたり、時にはコンサルタントと呼ばれる所に委託する。こうしなければ仕方の無い苛立ち、意識のある自治体であればあるほど歯痒い思いをしたであろう。特に今日ほど「まちづくり」「むらおこし」といった自治体自らの活力を、自力で築いていくことが求められていれば尚更である。

この度開催した「市町村の振興基本計画を考える」シンポジウムは、こうした時流の変化に対応して、近未来というよりも来世紀を睨んだ、「まちづくり計画としての総合基本計画」を策定するための考え方やノウハウを学び合うことを狙いにした。これまでの経験で捉えた総合基本計画であれば、ハコ物などハード事業が完成すれば完了といった、地域経営への視点が見えなかったはずである。

メイン・ゲストとして招いた島根県吉田村「鉄の歴史村地域振興事業団」（専務理事藤原洋氏）が取り組んでいる鉄（哲）学問は、地域のたたら製鉄の歴史を紐解きながら、文化を興し、文化をテコにして地域の活性化を図って

うとする、息の長い闘いに挑戦し、着実に進捗している事例を知ることが出来た。人口二千八百人の村での雄大な実験は、参加者一様に感動されたことと思う。同時に、この仕事への挑戦は、村挙げてと言う以上に、自治体の担当者である藤原洋氏自身の自分への挑戦でもあろう。

総合基本計画といえ、本来はフィシカルなものではある。実現に向けた経営戦略とスタッフが育たなければ、意味を成さないことが理解して頂けたものと思う。従って、総合基本計画策定のための事務的なノウハウを学ぶことが直接の目的ではなく、企画を担う担当者として考えなければならぬ課題について論議が集中したし、このシンポジウムの中では、計画策定に因んだ「悩み」を解きほぐすことが大きい狙いであった。

そのために、具内五八の町村からアンケートに回答して頂いた。調査結果は当日報告し、これを素材にして「悩み」の部分を討論することであったが、大森彌教授の総括講演、吉田村の事例報告で多くの部分が明らかにされたと思う。

ここ一二年の動きとして、これまで見られなかった「企画担当」のセクションが多くの自治体で作られた。おそらく地域の経営計画の重要性が認識され、これまでのタテワリの中では対応できない状況が生じているからであろう。

「企画」とは何か、「企画行政とは」といった基本的な認識がまずまず問われることになり、その重要性が求められている。そしてこの種の研究会が、これを機にさらに継続して開催されたい希望が少なくなかった。

振興基本計画は

まちの羅針盤

双海町 若松 進一

いつ、誰が、何のために、どのような思いをして作ったか定かでない分厚い一冊の本。どのまちにも必ずある積ん読的存在の「〇〇町振興基本計画」と題したこの本にスポットを当てたのが、今回のミニ・シンポジウムであった。予想に反しての百五十人にもものぼる参加者の多さに、改めて市町村の苦悩や担当者の危機意識を垣間見

る思いであった。

このシンポジウムには四つの分析と三つの角度があり、その分析と角度という支流を集めて、市町村の基本計画である本流を参加者自身が考える協働作業であった。

◆四つの分析

(1) 久万町の分析

振興基本計画の改定を機に、今までのような担当者のデスクワークや、コンサルタントだけに任せ安易な考え方で良いのかという自らへの問いかけから学習に発展。計画の①意味確認 ②作成への人のかかわり ③現状分析 ④夢・目標の設定 ⑤策定の作業 ⑥コンサルトのかかわり ⑦他事業とのかかわり ⑧利用方法等、想定されるスケジュールに沿って作業を進めることが提案された。

(2) アンケートの分析

アンケートは、シンポジウムのテーマ設定を考えるため、県内の担当者やかつての担当者に対して行われた。詳しい内容や分析結果は、担当された岡田氏の報告を待たなければならぬが、この調査から①企画とは何か(組織と機能) ②振興基本計画とは何か(理念と

策定のプロセス) ③住民参加とは何か(自治・自立・自発・協働) ④コンサルとは何か(コンサル領域) ⑤近未来とは何か(未来予測)など、策定にかかわる疑問点が浮かび上がった。

この素朴な疑問点への回答が、振興基本計画策定のノウハウであるが、計画にかかわる人の自問学習と意識改革が前提となるだけに、自治体職員としてのあり方も問い直すことから始めなければならない。

(3) 吉田村・藤原氏からの学び

藤原氏は事例講演の中で、自らが関わった吉田村のまちづくりを、①地域活性化対策の必要性 ②地域活性化の新しい波 ③鉄の歴史村の建設と地域活性化対策 ④地域経済活性化対策/その企画と戦略 ⑤まちづくり未来戦略 ⑥地域づくりの効果に何を求めるか、の六つの視点から分析。

地域づくりが知的戦略の時代にきたことを力説しながら、高い知識力、知的ネットワークが本物の企画を生むのだと結ばれた。

(4) 大森教授からの学び

まず自分の地域を知ることから

計画策定は始まるが、地域を好きになることで知りたいという気持ちが生まれる。プランニングに机は要らない。大事なものは、足と目と耳と口で住民と対話する暖かい心、住民の心になることだ。

振興基本計画策定は十年に一度のチャンスだから、住民が身銭を切るような真の共同参加で、計画を立てなければならぬ。好きで熱い思いを持った人が一人いればまちは変わる。



◆三つの角度

(1) つくる前の問題
振興基本計画がそのまちにとって何を意味するのか、いわゆる計

画の理念や意味についてはほとんど理解されていない。過去認識、現状認識の上に立って未来を認識せねば、良い計画はできない。

今回のシンポではその辺りの掘り下げができなかったことを残念に思うが、つくる前の作業として調査活動・共学等の必要性を認識しただけでも意味はあったと思う。

(2) つくり方の問題

この問題については、久万町の方角づけや参加者の問題意識の高さもあって随分討議されたが、計画は役場のもの、担当者がつくるものという従来からの流れを、いざ我が町で変えらるとなると大きな壁があるに違いない。

いずれにしても、計画を企画・実践するのは自分だとの認識に立ち、シンポで学んだことを実践に移さなければまちの未来は無いであらう。

(3) つくった後の問題

そんなもの見たことがない、読んだことがない、中身が理解できない。まちのベストセラーになるはずの振興基本計画が倉庫で埃にまみれている。つくる前、つくるプロセスも問題だが、つくったも

のの生かし方もこれまた重要だ。四本の支流的分析、三本の支流的角度を経てこそ川は大河となつて海に注ぐ。そこから初めて未来という目的に向かってまちづくりの航海は始まる。振興基本計画はまちの羅針盤であるかも知れない。

「振興基本計画を考える」

シンポジウムを ふりかえって

久万町 玉水 寿清

久万町が、過去二回にわたって策定した町の振興計画をふまえてそれを見直し、よりよいものにしたという願いから、研究会の計画を提案し、愛媛県まちづくり総合センター、えひめ地域づくり研究会、愛媛県市町村振興協会のご指導ご援助をいただき四者共催によってミニ・シンポジウムを開くことができました。

県内の行政機関・民間の企業・活動家など百五十名に余るご参加を賜り、それぞれの立場でご意見やご指導をいただいたことを感謝致しております。

開催にあたっては、①市町村の振興計画策定のノウハウをお互いに学習する。②策定済み、策定中、未策定の市町村が課題を持寄り、地域の実情に合った策定、策定後の活用の方策をさぐる。③策定にあたり、地域の実態をどのように把握するか、どれだけ多くの人々を計画づくりに参加させるか、具体的方策をさぐる。④誰のための計画づくりかその理念を学ぶ。⑤どういう組織体制で、どういう過程を経て策定するか、等を考え合うものでした。

市町村振興計画は、市町村経営・地域づくりのシナリオづくりであり、市町村振興発展の将来図を描き、その達成に向けて必要な振興策の大綱を定めるものであり、その認識はあっても、実際に作業を進めようとする内容、方法、順序等市町村によって特徴があり、色々な考え方もとに、よりよいものにしていくため、策定の実務に当る職員にとって、今回のミニ・シンポは意義があったと思います。

河野町長からの提言挨拶を受けての私の問題提起は、重複した点

や具体性に欠けた点もあったと反省していますが、今まで振興計画を担当したことが無かったために、生々しい具体性のある課題提起ができなかったように思います。

しかし、今回のシンポを通して私自身の心構え、つまり、原動力となるべき職員としての自覚・情熱をもって振興計画を策定しなければならぬという責任の重大さを新たに認識しました。また、私の町の職員仲間が知恵を出し合い、支え合ってくれるだろうという期待もできます。

久万町では、昭和五十八年に策定した振興計画を国や社会情勢の大きな動き、住民意識の多様な広がりのおかげで、町づくりの諸施策も大きく変り、特にハード事業をほぼ整えた時点で、それらを生かすソフトの面でも組織化や運営方針の確立を図ることを含めて、更に進んだ個性と魅力ある町づくりを推進するために、計画の見直しを行い、長い将来へ向けての振興基本構想、基本計画の策定作業を進めております。

今回のシンポを前に、市町村からのアンケートを集計・分析・検

討を加えていただき、当日配布できたことは、研究をより濃密にすることができました。また、市町村それぞれに認識を新たにしたいと思われます。

将来展望に立った計画づくりは夢がなくてはなりません、町の現状、住民の意識把握を重視して、より多くの住民を計画づくりに参加させるという理想に添うことは大事であると思ひます。

住民参加の方法は様々な形が考えられますが、自らの地域を地域の人々が認識することが重要であり、地域の生産活動や文化活動、環境や人々のつながりを考え合う機会をつくらなければならないと思ひます。

職員が町づくりの理念・ポリシーを持って指導的役割を果たさなければならぬし、そのための意見を引出す仕組みを考える必要もあります。

議員の計画づくりへの参加方法を考えることが必要であり、久万町では毎月一回の議員研修を活用することができると思われます。

策定作業の具体的な内容について深めることは出来ませんでした

が、大森先生、藤原先生の理論・実践論を生かせば、このシンポを開いた意義があったと思ひます。



一 参加者として

学んだもの

松山市 井上 謙二

今回のシンポジウムに参加して、私自身、自治体の一職員として学ぶべきものが多かったと思ひます。

大森先生のお話の中では、「基本構想の策定は十年に一度のイベントであり、広く『企画活動』と

して捉えるべきだ」との考え方が新鮮であった。

氏は「そもそも長期計画とは成り立ちにくいものである」ことを前提に、この企画活動を通じて、担当者は自分を研ぐことでその可能性を広げていく。そして一人でも多くの人がそれに係わることによって、それぞれが自分の事として地域を考えようとする意識がめばえ、住民と対話することで協働の地域づくりにつながることこそ、その意義があると語られた。

また、自分自身の言葉を持つ、地域の言葉を持つことが基本構想・基本計画であり、そのためには、時代の動向を知ると同時に、地域の文脈にあっていなければならない。文脈の一つとして考えられるのが、地域の歴史、更には歴史にはぐくまれてきた人々の文化だとも言われている。

この地域の文脈を読む作業が地域調査活動であり、この地域を知る作業を外の人に任ずべきではない。その作業として住民と対話することが、住民の気持ちを知り地域を知ることになる。等々、本質に迫る提言に胸を打たれる思いで

あった。

住民の意志をどう反映させるかが問題となるが、その前提として、自分が一住民としての意識を持つことが大切ではないだろうか。それは、「住民として役場等にモノ申す」気持ちでなく、「住民としてその地域の明日を考えようとする」気持ちのことだと思ひます。と同時に、住民の気持ちを幅広い視野にたって敏感に感じ取り、自治行政に活かすことのできる受け取る側としての姿勢も非常に重要になってくると思ひます。

具体的な手法・手段については、まだよく解らないが、職員として、一住民として自分はどう生きるのかということ、全ての基本としたいと思ひます。その姿勢の中から、藤原さんの言われる「自分づくり」「文化のある地域」「経済戦略」「知的ネットワーク」「未来戦略」などについて、それぞれの取り組みの中で一つ一つ整理し、話し合い、実践していくことだろう。

「地道で着実な地域づくり」の意味が、少しは解りかけたような気がする。

** あなたのコーナー **

◆ 殺す、あるいは 命について

伊予三島農業改良普及所

石原 純

やさしいこと、あいまいなこと、無力を装うこと、過去に阿ること、しかし、その底には、確実に殺す意図がある。

命を一挙全否定に断つのが死、

あるいは殺すということなら、命を部分否定的に取り扱うことも一種の死の形態ではなからうか。また、それを自己に、あるいは近隣に暗黙のものと強いるのは、形を変えた殺人ではないか。

私たちの身近にある死。

少しおかしいと思いつつも黙っていること。発言しないこと。本来の意図からはずれて存在すること。行動に移さないこと。そして静かに、判断も動きも無いままの傍観者で終ること。

あなたが、あなたを殺すだけでなく、あなたが死ぬことによって、

あなたを囲む人々にも死を強要しているのだ。

若き天安門の学徒は、将に一言の自由を望み、死をもって答を得た。私たちの長らえる命と、彼らの瞬間的な命——多様なコメントがあろう。しかし、彼らに、命——自由への希求——を全うしようとした意志は明らかにあった。



そのものが、あるがままに、すくすくと美しい存在であること。あなたが、わたしが、また、愛媛という地域が、その力を十分に活かし、生き生きとした調和の中で楽しいこと。これがそが命そのものの姿ではないか。

農業、普及(県)に居て強く思う。

とても美しい風土の愛媛が、はたして命を謳歌しているだろうか。

難しくはない。今を楽しんで生きると思う。蜜のひげ程の勇氣を持つて。あなたの幸いと私の

幸いが仲良い事を願いながら。

** あなたのコーナー **

◆ 未知数の可能性を秘める 農村であるために

久万農業改良普及所

西園寺 美恵子

私は、生活改良普及員。二十六年もこの仕事を続けていると、考え方の終着駅はみな農業につながってしまふ。

いま、私は二十一世紀のユートピアとして農村を描いている。迎えるであろう高齢化社会は、ゆっくりとした経済の流れに変わり、将来、都市でかかえきれなくなつた高齢者は、いつの日か形を変えて農村に吸収して行く役目を担って行くのではないかと。

それらの社会現象を受け身になつて受け入れるのではなく、積極的に働きかけ、農村が必要とする住みよい農村の環境整備をととのえ、農村の良さをPRして行ける基礎づくりが必要です。

農業は、生涯教育の場として、また体験学習の場として多方面に多目的に組み立て、子供から高齢者まで利用出来るように新しい価値

を見つけ出さねばならない。又、農業者自体もそれらに対応出来る人づくりと創り(生み)出す努力が必要です。そういった場に都市生活者や地域の消費者にも参加していただき、そこから新しい「物」や「人」の流れを生み出し、活きた活きた新しい農村に行きたいものです。

そのためには、各市町村をベースに広域的に組み立てたメニューが用意されなければならない。

「農業人+企業人+文化人」による開かれた農村をめざし、そこに住む人達の主体性に合わせた、リゾート開発が生まれないものと。

毎日、松山く久万町へ通勤の六十分、三坂峠から大きなキャンパスに夢を描いては消える毎日である。

「舞たうん」の仲間のみなさん、「四国の軽井沢」になるための楽しいアイデアを下さい。

(FAX) 〇八九二一

二一二五九二

最近、“知る人ぞ知る”というものが増えてきたと思いませんか？これもいろいろな分野で、専門化・高度化が進んだ結果でしょうか。そのお陰で新聞や雑誌等で拾い読みした程度の単なる知識では、それらの持っている能力や利便性などを十分に享受できなくなってきたのでは。

ところで、パソコン通信ですが、パソコン通信もまだ“知る人ぞ知る”という域を出ていないようです。パソコン通信を使って、パソコンの各種ソフトや数値データ、画像、文書データなどの情報サービスを受けたり、あるいは仲間同士で交換できることを知っている人は何人いるでしょうか。また、実際にこれらのサービスを享受している人が何人いるでしょうか。

“知る人ぞ知る”ものを発掘し、知って得をしませんか！

今回は、“パソコン通信”を知って、得をしている人達を何人か紹介しましょう。

● パソコン症候群、松山に上陸！

——連日、人々の心を奪ってゆく——といっても決してこわ～い病気ではありません。御安心を……。ECCCの中では、思わず指先がキーボードに吸い寄せられてしまうことをパソコン症候群と呼んでいます。

「TOWNタウン」には、いつだって私たちを迎えてくれるやさしいお姉様・こころのひろ～いお兄様たちがいます。年の差？なんて関係な～い！

これを読んで、あ・な・た。パソコン症候群にかかってみませんか？きっと楽しい会話ができますよ。 ID501 田村 純子

● パソコン通信で新しい生活感に

私の一日は、朝5時40分のTOWNタウンへのアクセス(接続)から始まります。これは、私にとっては、さながら朝の散歩の気分なんです。そして、一日のアクセス回数は、4～5回ってところでしょうか。

今や私の生活感は、すっかり新鮮で刺激的なものに変わってしまいました。だって、我が家のパソコンを通して、いつでも語りあえる仲間達と、この自由な空間を共有し、いつも向かい合っているのですから……。

ID222 岡本 三広

● 私のパソコン通信

小さな町大洲で電気店を営んでいますが、それまでは異業種の方との語らいの少なかった私ですが、パソコン通信を通じて時間の制約を受けずにいつでも自由に話し合いが出来る、アドバイスを受ける、年配の方、若い方の意見が聞ける、近くにいながら知らなかった方、遠くで語り合うことの出来なかった方々とも、親しくお話の出来るパソコン通信に胸膨らませ、とても充実した日々を過ごしています。

ID116 水 関 栄一郎

● 心のゆとりをパソコンで

パソコンって暗いって言われたことないですか？夜中にキーボードに向かって、ひとりでゲームやプログラミングなどしている姿は、背中が寒いですよネ。

通信って言葉も没個性的な響きのある言葉でしょう？でも、この2つがつながり1つの“パソコン通信”になると様子がガラリと変わっちゃうんですよ。

パソコンとはデータベースから情報を引き出すだけのものではありません。

とにかく“忙しい”“今すぐ役に立たない”で忘れられがちな“心のゆとり”をテクノ社会で得られるオアシスこそTOWNの“正体”です。あなたも今すぐに仲間！に引きずり込まれませんか。

ID328 柴田 悟

☆ ご意見や提供したい情報があれば ☆

このページは、パソコン通信ネットワーク「TOWNタウン」のまちづくりセンター・コーナーとクロスオーバーさせています。

ご意見や提供したい情報があれば、まちづくりセンターまで手紙又はFAXでお寄せください。

「TOWNタウン」上に代行入力して掲載致します。

TOWN タウン

パソコン通信ネットワーク

広げましょう ヒューマン ネットワーク

Vol. 9

Human Communication & Network



えひめコンピュータコミュニケーションクラブ

※ えひめ地域づくり

研究会議より ※

お知らせ

えひめ地域づくり研究会議の総会を、設立の時期に合わせて11月に行っておりましたが、今年次につきましては来春2月に予定しております全県交流シンポジウム(仮称)に合わせて実施したいと考えております。

ご理解いただきますと共に、できるだけ多くの皆さんにご協力とご参加をいただきますようお願い申し上げます。

秋だな... ひとchanのひとりごと

一年程前に買った私と妹の“ミラ・アズビー”今度それを売ってオートマ車にすることになった。一年間で走った距離は、何と二人で3000km。

あまり乗ってあげなかったせい、その分、なぜか離れるのがさみしい。情がうつってしまったのかナ……。はじめからオートマ車にしておけば、こんな思いをしなくても済んだものを。

今度乗ってもらう人には、かわいがってもらうんだよ、と、二人でアズビーのおしりをなでた。

—— 失ってしまったものが一番大切なものだったりするものだ。

南の空にはオリオン座がただひとつ輝き、ひき潮のような月が私を見つめています。東の空が赤く染まる頃、何もかもが静かで、あ、私、○○○なんだなって、しみじみ思ったりなんかもしています。

センターの人は変わっている。11時にお昼の注文は？と聞くとみんないっせいに時計を見て、むつかしい顔をして考え込む。そして、さんざん待たされたあげく、口から出た言葉は「弁当」。これが毎日続くから、見ている方もなかなか楽しい。

ほんの少しの温もりが恋しくて、わたしからあなたへのメッセージ。

どんな夢をみましようか。

きょう逢えなかったあなたに、秋の長い夜に送る独り寝のこもりうた。いまも何処かで眠れぬ夜が続いている……。

内容についてのご意見や、活動内容についての記事など気楽にお寄せ下さい。お待ちしています。

次回「舞・たうん」特集は

「明日のまちづくり

—子供たちとともに—」です。

「舞・たうん」編集係

二人のM.s. (丹下・久保田) まで。

〒七九〇

松山市道後一万一の二

(財)愛媛県まちづくり総合センター

TEL

〇八九九(二五) 五五五七

FAX

〇八九九(二五) 六六八〇